阪神高齢者・障害者支援ネットワーク　ニューズレター第13号
（略称　支援ネットワーク）
発行　1996年3月2日
発行人
中島久矩　中辻直行　梁勝則
編　集　森なつみ

ひろば

仮事務所　〒653
神戸市長田区林山町1-1
TEL 078-611-2463
FAX 078-611-2719

震災一年後の神戸

中辻直行

被災地では今、住専に対する6850億円の公金支出への怒りが溢れています。6850億円あれば、少なくとも必要な公営住宅の確保を始め生活復興ができます。しかし、待機所（旧避難所）に200人、公園テント村に300人、仮設住宅には9万人が困難な生活を続けています。しかも、その大半が生活再建のめどが立っていません。一方で医療費の一部負担免除は昨年12月末で打ち切られました。公営住宅の一時入居者は3月末までに空き仮設住宅に移行しろとの命令に強く反発しています。老人ホームへの一時保護も3月末で打ち切りとの方針です。仮設住宅の入居期限も後一年あまりとなり、被災者の心は追い込まれるばかりです。認定された震災関連死は850人を超え、孤独死は60人、自殺者は30人を超えました。高速道路や港湾施設などの都市基盤の復旧には目覚ましいものがありますが、被災者の生活復興は自助努力でといわれても、公営住宅の5万円から10万円の家賃負担も不可能な被災者が2万世帯以上いるにもかかわらず、家賃補助や減免すら決まっていません。絶望が被災者の命を削っています。

「国家とは国民の生命と財産を守るためにある」と言われますが、この日本という国は、国家としての存在意義を失っているようです。地震で失った財産を保障してくれとはいいません。地震で危機にさらされた命を国に守って欲しいのです。地震で「市民」は、「避難民」になり、充分な援助のない避難所で「難民」となりました。抽選でバラバラにされ、遠方の仮設住宅に移され「流民」となりました。そして国民として当然の支援を受けられず、「棄民」となろうとしています。神戸を忘れないで下さい。被災者を忘れないで下さい。

蛇足

「去る2月22日に、芦屋、宝塚、西宮、三田、川西、伊丹各市議ら47人が「住専救うなら被災者救え」と大蔵省前でチラシを配り抗議行動をおこし、保坂蔵相と土井たか子衆院議長、小沢一あてに要望書を提出した」という報道がありました。

これは国民共通の想い。でも、何かが足りない・・・最も甚大な被害にあった神戸市からは、市議の参加がないというのは？

被災地の動き

3月末、神戸市内避難所・待機所・公園テント閉鎖

神戸市は旧避難所・待機所。・公園テントを三月末までに解消し、仮設住宅への斡旋も原則的に終了すると発表。２１日現在、市内待機所は７カ所で124世帯。旧避難所は５つの学校に９世帯17人。その他の公的施設４カ所に16世帯34人。公園20カ所に159世帯372人が暮らしている。

(解消の理由)

昨年８月20日の災害救助法の適用打ち切りを機に避難所を閉鎖し、仮設住宅を斡旋しながら、避難所に止まることを希望する被災者に対し、待機所へ移転するよう求めてきた。震災から一年以上が経過し、待機所、旧避難所の困難な生活を早急に解消する必要があり、1,800戸の仮設住宅の空きを確保し、自立できる生活環境がほぼ整った。

(被災者の事情)

旧避難所　66才女性　兵庫区内中学校

一月末の学校避難所で「出ていけ」という男子生徒の声。「出ていくから家をさがしてくれ」と言い返した。夫が下半身まひで、車椅子。区内の仮設住宅は抽選に外れ、斡旋されたポートアイランド（人工島）にある仮設住宅を訪れたが、家にはエレベーターがなく、夫の病院も遠くなるため入居をあきらめた。

待機所　49才男性

肝臓を患い、三年前から失業中。「遠い仮設住宅からでは通いなれた病院に行けない。収入がないのに、毎日高い運賃を払えない。近くで公営住宅の建設を急いで欲しい」

公園　34才ベトナム人男性　（長田区内、ベトナム人ら115人が生活。）

「９年間長田で暮らし、仲間も多い。勤務先は近くのゴム工場だし」

１年を過ぎても解消されない避難所、テント村。早い時期から被災者の「わがまま」論がありました。本当は早く自分の家に暮らしたいのは誰もが同じ。しかし立地条件の悪い仮設住宅、決して低家賃ではない公営住宅等々問題が山積しています。どう考えますか？

仮設住宅を考える

西宮市内の地域型仮設住宅（被災した高齢者・障害者向けに市街地に建てられたケア付き仮設住宅。同市の地域型仮設住宅では24時間の生活援助員が駐在している。）が、設置以来９カ月経った現在も、全室未入居になっている。

仮設住宅の設置場所に、急こう配の坂が一キロ近く続き、周辺にスーパーなどの施設がないことが入居希望がない原因。

同市内では、十カ所に194室のケア付き仮設住宅があり、約140世帯が入居。一室も入居がないのは当仮設住宅のみで、大半は満室に近いという。

仮設住宅の実態調査行われる

神戸市が、市内で家を失い、市内外の仮設住宅で生活する人の実態調査を行った。入居者総数は、昨年末現在で5万7千224人と推計。(313カ所、3万2千346戸対象。)

うち65才以上の高齢者は1万7千845人。高齢化率は市内平均の14%に対し、仮設住宅では31.2%にのぼった。また高齢化率が50%を超える仮設住宅もあった。

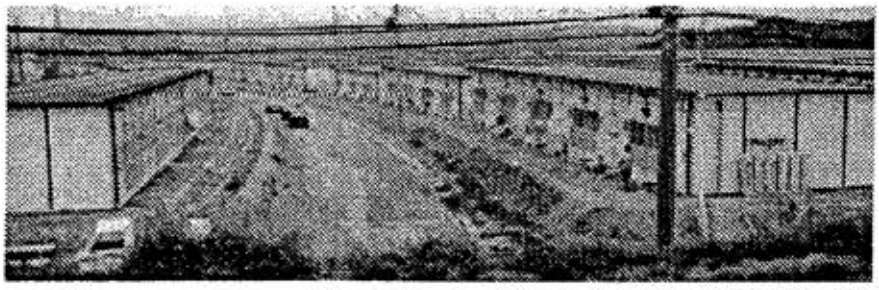
高齢者の独居世帯は全体の20.6%。(6.299戸)。高齢者のみ世帯が10% (3.507戸)。と高齢者の多い仮設住宅の実態が明らかになった。

【転居見込みのない入居者8割超える】

恒久住宅への転居見込みについて、総世帯推計の八割にあたる、2万4千551世帯が回答し、うち見込みが「ある」と答えたのが15.6%、「ない」が84.4%と、震災から1年を過ぎた今も、大半が恒久住宅への転居の見通しのないことがわかった。

見込みのない世帯の今後の住居希望では、公営住宅の希望が、76.7%。持ち家8.4%。公的賃貸4.8%となっている。

この状況に対し民生局は「現段階では恒久住宅の供給が少ないため、移転見込みのない世帯が多いと考えられる。今後は家賃補助も含めた支援策を検討したい」としている。



建設直後の仮設住宅

災害公営住宅2年間家賃を免除

兵庫県津名郡津名町は、震災で被災した町民が災害公営住宅に入居する際、入居から2年間、家賃を全額補助することを決めた。全額補助を打ち出したのは被災自治体で初めて。

同町の被災家屋は、全開603戸、半壊893戸、。現在249世帯が仮設住宅で暮らす。災害公営住宅として、町営160戸、県60戸を建設する。

今回の家賃免除は所得に関係なく、同町が発行した罹災証明を持つ全入居者が対象。災害公営住宅の平均家賃を三万円と見た場合、町費負担は二年間で1億6千万ほど。

柏木町長は「被災者の生活再建には何よりも住宅問題を優先させるべきだ。災害住宅に入る人は経済的にも苦しいはずで、全入居者を対象にした。高齢者には補助の延長も考えている。町財政は厳しく、補助が被災各自治体に広がるよう、国は考慮して欲しい」と語る。

最近のニュースから

今被災地で最も深刻な問題は恒久住宅。低家賃の公営住宅は提供されず、仮設住宅の入居期限が迫る中、被災者の不安は高まっています。そんな中で、低コストで、しかもコミュニティーが保たれる協同住宅に期待ができるのではないでしょうか。

復興住宅に協同居住タイプを

石東直子（都市プランナー）

仮設住宅は、入居者と立地場所、住居形式のミスマッチという決定的な問題を持ってしまった。今後、多くが被災者向けの公営住宅に転居することになるのだろうが、その時、また同じミスマッチを繰り返さないためにも、仮設住宅で顕在化した問題点を、しっかりととらえておく必要がある。

例えば、高齢者は長年住み慣れた地域から切り離されて住めないということ。また、住戸とともに、商店、医療機関、郵便局など日常生活に必要な居住環境の供給が求められていること。さらに、住戸形式の問題では、今まで長屋やアパートにすんでいた人たちは、狭くて古い住まいであったが、近所の人たちとの触れ合いがあり、地域にはぐくまれて生活が成り立っていた。仮設住宅では風呂、トイレが付き、居住水準は上がったかのように見えるが、隣同士の触れ合いは失われがちとなった。高齢者、障害者、母子家庭などの優先入居をとったのに、入居者に対応した最低限の生活サポートがなかった。

恐怖を体験した後では、ひとりで住むのが怖いと訴えていた人も少なくない。そこで「いつでもだれかと会えるし、いつでも一人になれる」「一人で食事をするよりも、たまには大家族のように集まってたべよう」という「協同居住型集合住宅」（コレクティブハウジング）を提案する。

コンパクトであるが、それぞれが独立した複数の住戸と、その延長としての共同スペースが組み込まれた集合住宅である。北欧諸国ではあらゆる世代を対象に、住宅施策として供給されており、高齢者専用のコレクティブハウジングもある。

復興住宅のモデルタイプとしては、一人暮らしは八畳程度の居室に、トイレ、浴室、小さな台所とたっぷりめの押し入れを、２・３人世帯は二居室を持ち、共同の大きめの台所、食堂、団らん室、洗濯室などがある。それぞれ独立した住戸で暮らしをしながら、共同スペースを核とした協同生活で、安全感と安心感、みんなと住むことの楽しさが生まれる。空間の共同化は、一戸あたりのコストも引き下げる。

昨年暮れ、こうした住まい方について、仮設住宅の高齢者と意見交換の場を持った。「いつまでも待たれへん。家賃も三万ぐらいしかよう出さん。」という声があったが、「理想的な住宅」と大多数の賛同を得た。もちろん高齢者だけでなく、他の世代も住んで、世代間交流があれば、より楽しく相互扶助の合理的な生活が展開できる。

震災をきっかけに「共に生きる」という気運が高まっている。公的住宅だけでなく、民間住宅での供給も望まれる。商店街や市場の復興にも、小規模の協同居住型住宅の建設がしやすい公的助成制度がほしい。

（2月25日　神戸新聞朝刊より要約）

西神第７仮設

うけてます和風喫茶

竹のカウンターで一服　心ほぐすたたずまい



竹製のひさしとすだれがおしゃれなカウンター。住民たちの談も弾む＝神戸市西区

（２月２４日　神戸新聞より）

神戸市西区の西神第七仮設住宅のふれあいセンター内の「喫茶」が、住民の憩いの場としてにぎわっている。竹製のカウンターなど和風のつくりとボランティアによる年中無休の運営が特徴。今後、ミニサイズの太鼓橋や日本庭園なども設置される予定で、遊び心いっぱいのスペースとなりそうだ。

同仮設住宅（千六十戸）を支援する「阪神高齢者・障害者支援ネットワーク」が、住民の協力でオープンさせて運営。メニューは、コーヒー、紅茶、日本茶、昆布茶となっており、料金は無料、でカンパを支払う。一日六十―九十人の客が訪れ、カラオケ喫茶となる月曜日は特に多い。

常連客の一人、船渡正人さん(六三)は「顔見知りが増え、毎日話をするのが楽しみ」という。震災前のように喫茶店に通えなくなった全盲の夫婦、下校後の子どもも訪れ、会議の場としても使われる。周囲の仮設住宅からの見学も多く、同ネットワークの支援で、西神第三、西神第六のふれあいセンターにも新しく喫茶がオープンした。

第七仮設住宅では、今後、竹製の門、竹垣、池やとうろうなどを備えた日本庭園を造り、窓にはすだれを垂らす予定。

現場責任者の黒田裕子さんは「高齢者が落ち着けるよう若いボランティアの工夫で和風にした。閉じこもりがちな人に外に出てもらうのが狙い。仮設住宅の住民のふれあいの場となる喫茶店が各地に広がってほしい」と話している。





ふれあいテントボランティアが運営する「ふれあい喫茶」。順調に開店から２カ月目を迎えようとしています。どたばたのボランティアウエイター・ウエイトレスの姿に見かねてか、住民の方が手伝いををしてくれるといった、ふれあい喫茶らしい暖かい光景もたびたび見られます。

震災一年によせて



山本雅代

「うちは夏にやっと地鎮祭や。」「うちは区画整理に入っとうから、まだまだどうなるかわからへんわ。」最近こんな会話が街のあちこちで聞かれます。私の住んでいる須磨区の板宿駅北界隈は都市計画に入っていないので、現在は建坪率の関係で一回り小さくなった家が建ち並び、その一画だけが新興住宅地になりました。

「あの日からもう一年が過ぎたんだ。」

復興に向けて動いている街の様子を見ながら、最近当時のことをたびたび思い出します。支援ネットワークにかかわってからいうもの、忙しい中にも充実した日々が続き、震災当時の自分が何を感じていたかということを忘れかけていたのでした。今思うと震災直後の正直な感想は「こわかった」というよりも、「驚いた」という方が近いと思います。

そんな私が本当に恐ろしいと最初に感じたのは、妹の友人であるIさんのご両親が亡くなった時でした。ドイツに留学した妹の代わりに、私が区役所での合同葬に参列しました。Iさんは焼け出された後友人の家に避難していました。「日のまわりが速く、窓を割って逃げたから。」と言って手には包帯を巻いていました。涙を見せまいとする彼女に「できることがあれば何でも言ってね。」としかいえませんでした。その時に見たおびただしい数の棺桶。部屋には入りきらなくて廊下におかれているものや、身元不明者の棺もありました。「人の命ってはかない。」そう思いました。

その頃の私はまだ避難所にいました。避難所で隣にいた60代位の女性は「長屋の２階に住んどってんけど、１階がぺしゃんこになって、下の人はあかんかった。私は近くの兄ちゃんが引っぱり出してくれた。」と力無く言われました。ふと足を見ると違う種類の、それも左右同じ側の靴をはいているのです。「たまたま手の届くところに預金通帳と眼鏡があったから」と言ってそれだけを持って出てきたということでした。でも次に戻ったときにはその長屋は全焼してしまっていたというのです。そのおばさんは銀行が開くとすぐにお金をおろしに行き、福岡にいる娘のところへ行くと言い避難所から出ていきました。何十年も前から須磨に住んでいて、「神戸は暮らしやすい街だった。」と言っていたあのおばさんは福岡で幸せに暮らしているでしょうか。

わずか10日間の避難所での生活でしたが、寒い体育館で毎日思っていたのは「早く家に帰りたい」ということでした。そして家に戻って足を思いっきり伸ばして布団に入った時「やっぱり家はいいなあ。」と思わず声が出□ てしまいました。でもまだ避難所にいる人たちのことを思うと、暖かい布団も少し居心地が悪い思いがするのでした。

現在、訪問活動をしていてときどき感じるのは、私自身の震災体験とのギャップの大きさです。

「家が全壊して、泥の中からひっぱり出されて避難所の廊下で数カ月間過ごして、やっと当たった仮設住宅ではみんなに親切にしてもらって夢のようだ。」おっしゃるＭさん。事故のために腰を痛めて歩くのもやっとなのに、避難所での生活はさぞ辛かっただろうと思います。

辛かった体験を私に話して下さって少しは心が軽くなったとおっしゃる方もいます。でもそれを受けとめる自分は「その気持ちは分かる」とは言えません。実際、訪問していて「同じめにあってへん人にはわからへん」と言われたこともあります。また別の方から「私もあんた達みたいな身分になりたいわ。」とも言われました。私には返す言葉もありません。わが家はありがたいことに一部損壊ですみ、あちこち隙間風が入ってくるものの、補修して住むことはできます。その私にMさんの辛さが本当にわかるだろうか。Iさんの心の痛みが、神戸を去ることになったおばさんの無念さがわかっていると言えるだろうか。

「わからなくて当然。」という声もあります。そうかもしれない、でもそれだけでは納得ができないものが私の中にずっとわだかまりとして残っています。たぶんこれからも解決することはないように思います。その傷はあまりにも深すぎて、本当のところは想像を越えるものかもしれないけれど、相手の痛みを理解しようとする気持ちが大切なのかも知れないと思う今日この頃です。

ふれあい訪問をして

上野佐和子



地震の時私は神戸にいましたが、幸いなことにほとんど被害がなくすみました。同じ神戸（ほとんど明石市ですが）にいるのだから何かしたいと思いながら、すぐに授業が再開され、試験、レポートに追われ春休みになり、気がついたら夏休みになっていました。そんな時、西神の仮設住宅でボランティアをした人の話を聴き、震災はもう過去の事となりつつあった私にとってショックでした。そして、学校の掲示板で「ボランティア募集」の貼り紙をみて、「夏休みもあと１カ月あることだし」と思って始めたボランティアでした。

今は、週一回ふれあい訪問をしています。初対面の人と話しをするのは苦手でしたが、何回か訪問するうちに顔を覚えてくれた住民の人もいて、訪問が楽しみになってきています。訪ねていくといろんな人がいて、いろんな話しをしてくれます。人生何でも勉強といって、何事にも前向きな人、心に小さな花を咲かそうと逝っている人、環境が変わると猫はどこかへ行ってしまうから、といって長田区まで交代で餌をやりにゆく夫婦、逆にこちらが励まされます。しかし、ここは交通の便が悪いとか、生活費が倍以上かかるとか、近所の人の悪口などを聴くと、どうしても自分の立場でしか考えられず、つい心の中で反発してしまい、右から左に話しが抜けてしまいます。

半年ほど前になりますが、学校の「ふれあい老人実習」で、公園にいた老人に話しかけたことがあります。主に戦争の話しをされ、私はただ聴いているだけでしたが、帰るときにその人は、「家をでる時は気持ちが暗かったけど、今はすこし軽くなった。」と言われ、握手をして別れました。そして私の心もなぜか軽くなったのです。「人と話しをする」ことは不思議な力があると勝手に思っています。訪問してこのことを改めて感じました。

最期に。神戸に来てもうすぐ２年経ちます。震災前は神戸のことをあまり知らなかったのですが、ボランティアをするうちに、神戸が好きになりました。

お知らせ

突然ですが、被災地の支援を全国に広めるため、4月から責任体制を分散することになりました。その第一弾として「ひろば」の発行を茨城県牛久市に移します。1月まで支援ネットのスタッフとしてひろば編集を担当していた秦が勝手ながらひろばを自宅に持ち帰りました。

事務局は引き続き神戸市長田区になりますので、ボランティア活動やカンパについては078-611-2463（平日の午前10時～午後5時。土日にお急ぎ用のある方はふれあいテント078-961-2100）までお願いします。

ひろばの原稿は現地の情報と同時に、全国各地の支援者の皆様の声を幅広く集めていきたいと思います。神戸への想い、意見、地域での動きや近況などを下記まで気軽にお寄せ下さい。

住所　〒300-11　茨城県牛久市小坂町1963-60
電話　0298-73-2334
FAX　0298-73-5280
ニフティ-　ID　GEF00142（送信の際はご連絡下さい）



秦なつみ

義援金ありがとうございました

敬称略　順不同　2月15日現在（前号紹介分をのぞく）

谷岡夏代　矢野久美子　岩本恵子　プール学院短期大学　二神純子　須藤恵子　細谷照子近藤和子　斉藤綱生　なかじま診療所　在宅介護者の会「やさしい手」　大倉正臣　三戸庸子　中四国ふれあい文化交流会　長純一　岡部一夫　宮谷直幸　小林篤子　昭和62年度幅下小学校卒業生新成人一同　全国学生社会福祉ゼミナール実行委員会　岩本千尋　山本雅世　黒石静子　池本久美子　小川満弓　浜田豊秀　ソニー生命保険株式会社　かえで幼稚園　鈴木ビイコ　石井布紀子　岩武甫宣、祥子　吉田永正　安川美智子、由美　ホシノショウサク

振り込み口座は　郵便預金　14390　49537411
名義　神戸長田高齢者障害者支援ネットワーク　会計　近藤純江
（ｺｳﾍﾞﾅｶﾞﾀｺｳﾚｲｼｬｼｮｳｶﾞｲｼｬｼｴﾝﾈｯﾄﾜｰｸ）